

支那と中国の由来^{*}

久保 耕治

1. はじめに

我が国と中華人民共和国との間に国交が開き、留学生が初めてやってきた1980年頃の話である。一人の女子留学生が、本国の医学部を抛棄して、その当時、私のいた大学の中文科に同級生としてやってきた。書棚にある戦前の書籍はすべて『支那思想』、『支那文学』のように、『支那〇〇』と書名がなっているのを見て、「支那」の意味を手持ちの辞書で調べたがまったくでてこない。漢語辞典、漢日辞典、国語辞典のいくつかを調べたが項目が見つからないという。しかしこれだけの書名に使われている言葉がなぜないのかが分からない。読み方はシナ以外に考えられないのでお手上げ状態だという。「中国」に置き換えると、ことごとく意味が通じることは薄々感じていた。気易く聞ける雰囲気があったためか、私に質問してきたので、戦前までは英語のChinaの意味で使用し、今は使用しなくなった言葉であることを説明した。なぜ使用しなくなったかの経緯、小型の国語辞書にはなぜ載せられないかも説明した。

さて、辞書にもない「支那」の意味は日本人なら誰しもが知っている。そうして何となく使ってはいけない言葉だと思っている。どうしていけないのかまでは考えない。戦前のものを読めばすべて支那であって、中国なる言葉はでてこない。

* 本稿は、2009年6月21日に「日本と台湾を考える集い」（台湾語教室）での講演原稿に加筆したものである。

KUBO, Koji 1949年滋賀県生まれ。元滋賀県立高校教諭。チャイナ研究家。これまで四角號碼検索による各種辞書の索引製作に従事。

支那・支那人・支那服・支那語・支那学・支那蕎麦・支那料理・支那事変・支那浪人・中支・南支・北支・日支などとして出てくる。これらが戦後まもなく一斉に中国・中国人・中国服・中国語・中国学・中華ソバ・中華料理・日中戦争・華中・華南・華北・日中となった。今でも「シナ」として使われるのはインドシナ・シナチク・シナ海くらいである。シナチクは「メンマ」なる訳の分からぬ言葉で呼ばれることが多い。漢字を当てずにカナでシナと書けばよいのか。姑息な方法を採用したものである。支那とはどういう言葉であるのか。どうして使用がはばかれるのか。また中国に置き換えることが妥当なのかどうかを考える。

2. 「支那」考

高島俊男氏によると我が国で最初に「支那」がでてくるのは空海の著書であり、一般に読まれるものでは、『平家物語』に「孔子顔回は支那震旦に出でて忠孝の道を始め給ふ」だとのことである（高島『本が好き、悪口言うのはもっと好き』文春文庫、1998年、とりわけ「IV＜支那＞はわるいことばだろうか」を参照）。平安時代にはすでに知られていた。江戸時代には儒者である知識人は知っていたが一般にはまったく使われず、「から」「もろこし」と呼ばれ、文字で書くときには「漢土」「唐土」などであった。

歴史学者の岡田英弘によると、現在我々が使用している「支那」の用法は新井白石に始まるという。「1708年に日本に密入国して逮捕されたイタリア人のイエズス会宣教師ジョヴァンニ・パッティスタ・シドッティを新井白石が尋問して、イタリア語では隣邦を『チーナ』と言うことを知り、これを漢訳仏典の『支那』という字画を当てはめたものである」（『岡田英弘 著作集1』藤原書店、2013年、220頁）。ここより支那の用法が始まったのであろう。勿論、蔑意などとは無縁である。

江戸時代末の「支那」の例としては、黒船に乗って開国を江戸幕府に迫った、『ペリー来航大統領国書』にある言及「北亜墨利加合衆国は、・・・貴国従来の制度、支那人及び和蘭人を除くの外ハ、外邦^{ママ}と交易することを禁ずるハ、固より予が知る所なり」（広辞苑電子5版）が良かろう。十九世紀に入って洋学がさかんになると「China」の訳語として「支那」が本格的に使われだした。古くからの

言葉とも、意外に新しい言葉であるともいえる。

「China」の訳語として「支那」を復活して使うのはすばらしいことである。他の漢字のいずれを使ってもこれ以上に良いものではないと思う。「支那」なる言葉は、我が国で作られたものではない。支那本国から遣唐使随伴の留学生が持ち帰った言葉である。空海の留学生仲間が持ち帰ってきた言葉だったかも知れない。仏典はこの時代より先に伝来したが、「支那」も伝わってきたかどうかは未確認である。大量の漢字語が伝来したこの時代に伝えられたと考えるのがもっとも妥当であろう。

さて「支那」はどうして生まれたのか。仏教が支那に伝来する以前にはまったく見当たらない。支那本国では自分の国を、時代を超えて表現する呼称がなかった。そもそも、自分のところが世界のすべてであり、対立する他のものがないところには、自分の国という概念などあろうはずはなく、自身を他のものから区別する言葉は成立しない。仏教が伝来して、高度に発達した文化を持ち仏教を生みだすまでにいたったインドの存在を認識することによって、自身の他にインドという違った世界を知り、初めて自分のところを示す言葉の必要性を意識することになった。ここにインドに対するものとして自分のところをさす言葉が成立した。インドから見ると、周りの国をヒンドスタン、パキスタン、アフガニスタンのように、○○スタンという。北東遙かかなたにあるという国をシナスタンと呼んでいたらしい。ここにいうシナは秦の名前が伝わってできたものという。インドでシナスタンなる言葉で呼ばれる自分のところを指す言葉を、仏典とともに「支那」として伝えた。その後、支那本国でつくられた仏教書は『支那撰述本』と記され仏教界では近代まで盛んに用いられた。仏教の本国「印度」を意識しつつ、王朝の別を越えた通時性をもつ「支那」は仏教界での用語として、殊に使い勝手が良かったと思われる。どの王朝時代に記されたものかを示す必要がない、あるいは記すと現王朝との関係で不都合だという場合、通時性もつ「支那」は使いやすいのである。「支那」という表記の他に、至那・脂那・震旦・振旦・真丹・神丹なども表記されてきた。○旦・○丹というのはシナスタンの「タン」の名残であろうか。

現在、かの国の小型辞書には滅多に「支那」の項目が見あたらない。その中で、『四角號碼 新詞典』では次のように記述する。我が国でいう支那を強く意識し

たものである。

支那 外國人稱中國叫支那、最先見於印度梵文中、是文物國的意思、或以爲支那系秦字的轉音、秦朝統一中國、聲名遠播、所以外國人稱我國叫秦（四角號碼新詞典）。

その意味はおよそ上に解説したものに近いので略す。『新華字典』というポケットにも入るくらいの小型の字書がある。これは小型ではあるが、中華人民共和國の文字を知るときの基本資料となる重要な字書である。この中に、「老撾 國名、在印度支那半島」というくだりがある。「撾」の字を解説するものである。「老撾」はラオスを意味する。国名、インドシナ半島にあると説明している。『新華字典』という国を代表する字書に「支那」は存在するのである。印度支那半島とはいうまでもなく印度と支那の間にある半島の意味以外ではない。印度支那半島を台湾では中印半島⁽¹⁾と言い換えている。

このようにして生まれた「支那」は先に記したように我が国にまでもたらされた。日清・日露の戦争までは「から」「もろこし」にかわるハイカラな言葉であった。当時、我が国に來た清国留學生の多くが意識して国籍欄に「支那」と書き入れた。他に「清国」、「中国」もあった。孫文の論文「支那保全分割合論」、宋教仁の著書『二十世紀之支那』、梁啓超の筆名「支那少年」、女性革命家秋瑾は自称「支那第一女」（黄文雄〈台湾〉の諸著作および嚴安生〈中華人民共和國〉『日本留學精神史』岩波書店、1991年より収集）と並べれば、「支那」のどこが悪いのだろうか。

日清・日露の戦争を通してかの国の実態が知られるとともに、一般国民のなかに侮りの気分が芽生え、付け加わっていった。清国留學生は市井の日本人と接することにより、発せられる「支那」「支那人」に侮蔑を感じていった。清国人留學生の辮髪を見て、「チャンチャン坊主」と囃し立てて笑いものにしたという。清に代わり中華民国が成立すると、日本留學生の声におされ、中華民国政府は「支那」と記された外交文書の受け取りを拒否することにした。日本の敗戦までは外交文書を除けばすべて「支那」で通用した。他にかわる用語がないので当然のことであった。当時の日本人の「支那」意識は次のエピソードに端的に現われている。

「三等國民のチャンコロの服を着て、支那語などしゃべって、それで貴様、恥ずかしくないのか」と関釜連絡船の中で李香蘭は入国係官から詰問される山口淑

子『李香蘭 私の半生』新潮文庫、1990年。⁽²⁾

これについて、少しばかり説明する。李香蘭とは戦前の満洲で一番良く知られた（映画）女優である。連絡船で日本に初めてやってきたときの入国審査で同僚の俳優とともに係官から受けた言葉である。同僚は日本語を解さないなのでこの言葉の意味もわからない。芸名、李香蘭は実は日本人で、山口淑子（後の大鷹淑子 元参院議員 [1974-92]）が本名である。本国人と同等に支那語を話すので、満洲でも日本でも支那人女優とされていた。同行した俳優も李香蘭を同国人と思い、疑わなかった。李香蘭の旅券は日本であり、これを見た係官は日本人が支那服を着て支那語を話すのが鼻持ちならなかったのである。

上海の租界にある公園の入り口には「支那人と犬は入るべからず」と立て札があったそうである。真偽のほどは知らない。上海にあった東亜同文書院大学を卒業したある学者の方によると、公園でそのような立て札は見かけなかったそうである。当時からそのような立て札があったという風評が流れていたことも事実であった。さもあったかのように、けしからんことだと批判した文章を読んだことが何回もある。日中友好が叫ばれていた当時のものである。当時の「支那」という言葉が含意するものがここに述べたものから大きくはずれるものではない。

日本の敗戦により戦勝国となった中華民国は日本政府に対し、「支那」をやめて「中華民国」の国号を称するよう強く要求した。これを受けたGHQの命令により、敗戦国政府は昭和21年6月7日に、今後は「支那といふ文字は中華民国として極度に嫌ふものであり、…今後は理屈を抜きにして、先方の嫌がる文字を使わぬやうにしたいと考え、…要するに支那の文字を使わなければよいのですから、…唯歴史的地理的又は学術的の叙述などの場合は必ずしも右に抛り得ない。…」と、通達を出した。これ以降、「支那」が使われなくなったのである。通達では地理的、学術的叙述は別であると明記しているにもかかわらず、すべての「支那」が排除され、「中国」に代わることになった。日本人の中に戦時中の行為に後ろめたさを感じ、その贖罪意識から新聞・書籍に「支那」を見つければ糾弾することに奔走した人が多くいた。新聞・出版界そのものが、そういう「中国」に媚びる雰囲気であった。「支那」狩りの嵐が吹き荒ぶ中では、もともと支那がすばらしい言葉であるということさえためられる。「中国」はかの国の人々が「外」に向かっていえば自尊の意であり、周辺の国の者がかの国に向かってい

えば自己卑下と敬意をこめた言葉であるという基本となる意味（後述）さえ言い出せなかった。

中華民国が日本政府に要求した「支那」を止めろという理由は言葉の発祥を理解していない誤解に基づくものである。自分たちが作った「支那」という言葉を日本人が侮辱するために作った蔑称だというのは、先に見てきた通りで、言葉のすり替え意外の何ものでもない。その点、北朝鮮が自分たちを朝鮮、朝鮮人といって矜持をもっていることには、何を置いても敬意を表したい。日本統治時代には「朝鮮」が何かと蔑意を含んだ言葉であったことを踏まえながらも使用し続けたことをうれしく思う。朝鮮という漢字の字面もすばらしい。ひとときの不幸のために言葉を変えなかったことをうれしく思う。韓国では日本人が「朝鮮」というたびに抗議がある。北朝鮮との対抗意識も分からぬではないが、北朝鮮との国勢にこれほど大きく差がついた現在であるなら、もう少し大人の対応をする余裕があってもいいのではないか。国内では、朝鮮日報、朝鮮ホテルといった朝鮮を冠した言葉は問題にならない。日本人だけがこの言葉を発すると問題にするのである。

手元の小型国語辞書を見ていただきたい。そこに「支那」の項目があるかどうかである。岩波の『国語辞典』といえ、代表となる国語辞書の一つであろう。「支那」の項目は見あたらない。この辞書を使つては李香蘭が受けた言葉の意味はまったくわからないのである。国語辞書の役割を放棄し、かの国に媚びた恣意的な語彙選択といわざるをえない。編者がこの語の重みを知らないのではない。十分に知った上でわざと取り上げなかったのである。出版社の姿勢の問題である。それでいて、「支」の項には「＜支那（しな）＞の略。＜日支・露支＞」とでてくる。「支那」の略ならば当然に「支那」の項目を立てるべきである。三省堂『新明解国語辞典』では、「・・・＜中国＞の旧称。・・・俗に中国を呼ぶ名」とある。学研の『現代新国語辞典』では、「＜中国＞の旧称。・・・江戸時代中期から第二次世界大戦まで用いられた」となっている。どの辞書を見ても若者が正しく支那の意味を理解することはできないだろう。⁽³⁾

大型の国語辞書『広辞苑』第五版では、「【支那】（＜秦しん＞の転訛）外国人の中国に対する呼称。初めインドの仏典に現れ、日本では江戸中期以来第二次大戦末まで用いられた。戦後は「支那」の表記を避けて多く「シナ」と書く」と

なる。なぜ「支那」が忌避されるかの説明はない。重要な言葉にもかかわらず、さりげなく済まそうとしている。その一方、大型辞書であるから、「支那学」「支那料理」「支那浪人」などの「支那〇〇」という項目は、見出し、本文中にも数多く使われている。

私がこの項目を書くとすれば、「インドに対し、〈中国〉の意味で古くから仏書に見える。明治から敗戦まで英語のチャイナ（China）の意味でひろく用いられた。戦後、言葉に蔑意を感じる〈中国〉の抗議で今はほとんど使わない。シナ海・インドシナなどに残る」となる。

3. 「中国」考

先に引用した歴史学者の岡田英弘氏は、「中国」について次のように記している。

「清国留学生が日本から持ち帰った新しい概念のなかに、チャイナを意味する『支那』もあった。しかし、漢字は表意文字なので、音訳はなじまない。そこで『支那』の訳語として、古典の『中国』を当てるようになった。こうして二十世紀に入って、『中国』は日本語の『支那』、今で言う『中国』の意味になった」（『岡田英弘 著作集1』221頁）

という。

次に「中国」の意味について考えてみよう。私を含め「中国」を使いたくない人たちの理由は大きく二つある。

（1）中央の高みに立ち、周辺諸国が臣下の礼をとるときには、その国が「中国」（わが国）となるのである。これが言葉の原義である。自分の国が世界の中心だと思えばその国が「中国」なのである。かの国では、最も古い書物である『書経』に現れ、『史記』にもある。孔子以前からこのように使われていた。岩波文庫の『日本書紀』「雄略天皇七年」には「新羅が中国（みかど）に貢ぎ物を送らないのでこらしめた」（原文「于時新羅不事中国・・・汝宜往罰新羅」）というくだりがある。新羅が日本の手下にならなかった。ここでいう「中国」とは「わが国」の意味であるから、実は日本のことである。

「中国」とは朝貢関係を下敷きにした言葉であり、周辺国を東夷・西戎・南蛮・

北狄とみなし、人間三分・^{けもの}獣七分が住んでいる所であるという意味をもっている。黄河の流域を「中国」とすると、「魏志倭人伝」に記された我が国を指す「倭」は、さしずめ東夷の中でも海のかなたに住んでいる「背の曲がったちび」（藤堂明保）種族ということになる。その長官は「卑狗（ひこ）」であり、女王は「卑彌呼」である。長官は品性下劣なイヌのような奴であり、女主人もチビのはしためのようなやつという風に悪い字を当てたのである。「倭奴国王」は光武帝から国王と認められ国璽をもらってはいるが、「奴」という扱いであった。「倭」に人偏がついて、人扱いしていただいているだけで、「御の字」とせねばなるまい。多くの種族が「^{けもの}獣偏」（「犴」）で表わされるのが当然の時代であった。とまれ、わが先祖を記録していただいているだけで十分に有り難く思わねばなるまい。千八百年ほども昔のことだから相手から見てそのように見えたのは当然である。「中国」から見ると周囲はみな野蛮人が住んでいる国という関係が透けて見えてくる言葉である。このような原義を拭い去ることができない「中国」を使いたくない。これが承服できない第一の理由である。

ちなみに、韓国や北朝鮮では今でも日本人のことを「ウェノム」という。「ウェノム」とは倭奴の当地漢字音である。光武帝に「倭奴国王」と認められて以来、隣国からは「倭奴」と呼ばれていることを倭人は心して記憶に留められよ。

（２）「中国」本国には中国語という言語はない。日本で言うそれは普通「漢語」といっている。中国語といえば、ウイグル語もチベット語もモンゴル語も朝鮮語も入ってくる。「中国」国内で使われるすべての言語の総称が中国語である。言葉だけでなく、「中国」というものの範囲を厳密に規定するときには、はなはだ使いにくい言葉である。日本で中国文学といったときにはモンゴルやチベットの文学は入らないのが普通である。中国（中華）料理も同様である。おおよそ文化関係の事柄を表わすときに中国という言葉はふさわしくない。この分野でいう「中国」は漢民族の文化に根ざすものであるから、そこに限定した英語の「China」と等値の「支那」がふさわしい。これが「中国」を使うことに抵抗を感じ、避けて通りたいと思う第二の理由である。

支那語で話し書くときに、相手に「支那」と言っても通じない。始めに記した留学生がこの言葉を知らなかったように、一般の人々はまず「支那」という言葉を絶対に知らない。その相手に「支那」を使っても珍糞漢糞で何を言っているか

通じないだけである。会話での「中国」の使用は当然である。「中国」とは、外国人が使えば「貴国」の意味である。ちょうど都合がいい。彼らが国内で「中国」と言えば、「おらが国」の意味である。そのように称するのは当然のことである。相手が理解できる言葉を使うより方法がないのである。

「中国」から派生する「中国語」は、逆にここでは使えない。「漢語」なり、「普通話」（共通語）でなければならず、料理も中華（中国）料理ではどの料理を指すのか分からない。北京料理・広東料理・上海料理と地域を限定した料理名をあげるのである。もちろん支那語であるから、粵菜（広東省の料理）のように○菜として地域名を冠することは言うまでもない。

それでも「ちゅうごく」や「ちょんくお（中国）」を口にしたくないときには「チャイナ」と言って誤魔化している。日本語の中における外来語は間に合わせの一時的な響きをもつ。考えてみれば失礼な言い方なのであるが、相手が「支那」は嫌だ、こちらは「中国」は使いたくないとなれば「チャイナ」しか残されない。「チャイナ」がどのような日本語の響きであるかまで感じ取る留学生はほとんどいないようである。支那語で話すときにも「チャイナ」「チャイニーズ」といつて「中国」を避けて通っている。話し相手はどのような語感で受け取っているかは分からない。おそらくアメリカ大好き^{おおはやり}の日本の国民性から、英語表現を好意的な語感で受け取ってくれていると思うがどうだろう。そうならば、外来語大流行の昨今、「チャイナ」で統一するのはいかがだろうか。

「中国」と国交が結ばれてしばらくしたときの事である。中華人民共和国政府が「中国銀行」にその名称を使うなと申し入れるという事態が発生した。「中国銀行」とは岡山に本店を持つ地方銀行のことである。中華民国（1912）や中華人民共和国（1949）が成立する以前から使用している中国という名称の差し止めを日本政府に要求したのである。我が国では近畿地方と九州の間を中国地方と普通に呼んでいる。その山地は中国山地である。近畿を平定した織田信長は部下の秀吉に中国征伐を命じて毛利氏を攻めた。それは秀吉が明を攻めた（文禄・慶長の役）のことではない。この時代にはすでに中国地方と呼んでいたのである。日本人ならば誤解するはずのないものであるが、かの国の留学生には理解できない。彼らは数百年まえよりその国では中国なる名称をもって自国を呼称していたと信じている。二十世紀の中華民国になったころより始まった名称であることを知る

由もないのである。かくて、言いがかりとしか言いようのない要求を突きつけてきたのである。さすが、「中国」^{びいき}最眞の輩もこれには同調できなかったようである。

「チャンゴ」なる若者言葉をご存知だろうか。私も初めて聞いたときには理解できなかった。状況から「中国語」であることはすぐに分かった。どのような意識が働いてこの言葉ができたのかを考えてみた。「中国語」は一時期「輝く」言葉だったときもある。国交が「開く」前後から文化大革命の「造反有理」に酔いしれている頃である。「中国語」は、天安門虐殺事件の頃より普通になり、今では「Made in China」の安物・「易もの」言葉になり果てた。漢字を使っているから修得しやすい言語として、大学での第二外国語の選択で大流行だそうである。ことに体育会系の運動部御用達言語である、とその担当者から聞いているから間違いはあるまい。選択してみたものの、発音の段階でほとんどが投げ出してしまっている。このような連中が大学で「チャンゴ」を習ったと言っているのである。知っているのは二ハオくらいのものである。

さて「チャンゴ」と聞くと、連想される「チャンコロ」「チンコロ」「ニャンコロ」との言葉は、いずれも響きが実によろしくない。北京語「チュンクオ（中国）」と日本語の「語」を組み合わせて「チュン語」になり、言いやすいように「チャン語」と変化したものが広まったと解釈している。日本語では正式な言い方を略して言うとき軽く見る気持ち、侮りを感じる。この場合も語感として多分にそのようなものを伝えんがために発せられていると思う。穿った見方をすれば、「チャンコロ語」を略して「チャン語」と言っているともとれる。こちらのほうが正しいかもしれない。ごく最近では、「チャイゴ」といういい方が若者のなかで広がっているとも聞く。どちらにしても耳障りな言葉である。このような言葉が広まる背景には若者の間にわだかまる嫌中感情があるのは間違いない。かの国の若者が「小日本（シャオリベン）」と叫びながら反日デモを各地で行い、大使館に投石したとことと相呼応している。小日本の意味はチャンコロの裏返しの蔑称である。日本人新聞記者のインタビューにも平然と小日本を使っている。多感な日本の若者がこれに反応しないはずがない。時代はますます反日と反中感情の相互醸成になりつつあるのだろう。

「チュウ」なる言葉を電車の中で聞いたこともある。「チュウ」がパチンコ台

を操作したらしい、「チュウ」の手口は荒っぽい、のように不正・犯罪に関して「中国人」が絡んだ事件について話している中での言葉である。このような言葉が巷でどこまで話されているかは知らないが、「中国」・「中国人」のもつ語感が良くないことは確かである。はや「中国」の「支那」化が始まった一歩と記憶している。2000年頃の話である。

「中国」人留学生が引き起こした日本人一家殺害事件、各地で横行する密入国者による強盗事件・ピッキングという不正開錠による窃盗、パチンコ台の不正操作、西安での日本人留学生の卑猥な寸劇に「激怒してみせた」彼の地の学生たち、マカオの近郊珠海で日本企業が宴会の後に集団で「姫買い」をやらかしたのに「憤激してみせる」大衆、トヨタの広告（龍がトヨタの車に敬礼する構図とこのこと）を侮辱だと大騒ぎするメディア、サッカー試合における非礼な振る舞いには、「日中友好協会」会長が申し入れを行うまでに到った。大きなわだかまりが双方に沸騰している。双方の関係は最悪をむかえていると報道されており、その通りと思う。このような状況下では「中国」のもつ意味に少しでも気づいた人は、その使用を避けて通りたいのが心情である。

2006年3月に台湾からきた女子留学生の保証人になった。下宿ならぬ賃貸マンションを借りた。資産家のお嬢さんであり支払いに不自由しないのであるが、中国人と言ったものだから、仲介不動産屋は不安に思い契約を渋った。このことを伝えてきたので、中国人の意味することを説明し、今後は使わないよう注意した。果たしてこのことが善いことであるかどうかは問わない。台湾人が快適に過ごすためには無用な誤解を招かないよう台湾人という方が望ましい。これが昨今の状況であろう。

そのころ台湾のある有名なホテルの経営者夫妻とそのバーで酒の勢いに任せて馬鹿話をしたことがある。二人とも若いころは東京に住み、日本で教育を受けているので日本語に何の不自由もない。こちらより余程しっかりした「標準語」である。話の流れの中で、小学校の時に日本の学校に転校し、言葉が分からない故にいじめを受けたことも聞いた。ままある話である。その時は自分が台湾人であると意識していたという。高校を卒業し大学にはいると言葉の不自由がなくなったことと、そのころに丁度台湾と断交し、「中国」と国交が開かれる状況に不安を感じ、人から聞かれると「中国人」と名乗っていたことも話してくれた。似た

ような状況の人が同じようにしていたという。では今はなに人と名乗っているかと畳み掛けると台湾人だという。なぜ「中国人」を止めたのかと聞いた。意地の悪い質問ではあるが、遠い親戚関係にも当たるので笑いながら、「だって、中国人と聞けば日本人はドロボウと思っていますよ」と婦人が答えてくれた。日本人の心の隅まで当然に理解できる人の気持ちである。台湾に行ったとき宴会の席などで国籍意識の話題をさりげなくだしてそのひとの意識を探るようにしている。断固台湾人だという人もあれば、中国人と思っている人、台湾人であり中国人だと考える人と様々である。日本に住む台湾人の多くが前述のホテルの経営者夫妻のような思いを日々抱いていることだけは多くの人との会話から確信している。⁽⁴⁾

4. 終りに

40年近く岩波の『世界』を購読している。今年（2014）の1月号に「シナ」という言葉が使われている論文が掲載された。「ウイグル人のレジスタンスは何を発信したのか」（楊海英）である。昨年末、天安門前広場でウイグル人による突入・炎上事件が報じられた。少数民族の抗議事件が頻発する背景を、自身が少数民族モンゴル人である立場より解説する論文である。中国という言葉を使いたくないということを述べている。

「満州人の故郷をシナ人がずっと東北と呼んできたのも、シナ人が一九世紀末になってからこの地に侵入しはじめた歴史を物語っているだけである」。

「私たちモンゴル人やトルコ系のウイグル人など、北・中央ユーラシアの人たちは歴史的にずっと中国をシナ（Jana）、漢族をシナ人（Janag）と呼んできた。そう呼ぶ相手は長い文明を有し、さまざまな形で交易を続けてきたので、われわれも彼らに敬意を抱いている。相手を差別する伝統も私たちの脳裏になかったので、当然、シナという表現にも差別的なニュアンスは含まれていない」。

さらに、歴史学者岡田英弘氏の言葉を引き、氏の提唱する説に賛同する。

「〈中国〉という名称は19世紀までは存在せず、あったのはさまざまな王朝名である。英語など西方世界がいうところのChinaは歴代王朝を指してきたし、日本語のシナもそれに対応する概念である。〈中国〉はあくまでも1912

年に清朝が崩壊した後の国民国家的な現代の実体にすぎない」。

この論文を掲載したこと自体が、従来の「中国」指向からの転換を図っているものと捉える。

注

- (1) 最新の『新華字典』11版（2010年）では記述が変わった。「老撾 國名、在中南半島」とある。中南とは「中国」の南にあるという意味であり、中印よりも中華民族主義の主張を鮮明にした記述である。今日のかの国の姿勢を表わした記述に変えたのである。
- (2) 「チャンコロ」とは支那人を侮辱した言い方である。2007-02-11のテレビドラマでもこの部分はそのままに使われていた。蔑まれた支那人がチャンコロ、支那に反発するのは当然であった。チャンコロの語源ははっきりしない。『広辞苑』では、「＜中国人＞の中国語音zhongguorenの転訛」としている。清国qinguoの転訛とするものもあり、辮髪をした人をチャンチャン坊主といったことに発するとしたものなどいくつかがあるようだ。その語が生まれたのはいつ頃だろうか。戦前の台湾においてはどうかであったろうか。書かれたものおよび直接に聞いたことをまとめる。

支配層である日本人は、台湾人対して、チャンコロの一種であると考えていた。元のチャンコロという風に考えたかもしれない。表だっては台湾人というが、台湾人も支那人の一部だと考え、チャンコロといった。台湾人のほうは、日本人でないという意識と、平等であるべき日本国民だという意識の葛藤が常にあった。チャンコロというのは支那人を言うのであり、われわれ台湾人ではないと考えたかった。今でも日本人旅行者が台湾人から、外省人をさしてチャンコロというのを聞くことが時々あるのはこの名残である。台湾人意識が高いほど支那に距離を置き、嫌悪感、反発心を抱く日本語世代の台湾人が発するのである。

戦前、総督府厚生関係の役人の子供として現地で過ごした日本人（Yさん）の話である。毎日、台湾人の子供と遊んでいた。子供であるから喧嘩はいつものことである。この時、台湾人の子供から「チャンコロ」と罵られたというのである。罵られていることは分かるが意味が分からず、家に帰り両親にその事を話すと二人は腹を抱えて笑い転げたという。「チャンコロ」といっている台湾人の子供も意味は知らない。日本の子供から「チャンコロ」と言われたので、こんどは相手をけなす言葉として返したにすぎない。他愛のない喧嘩にすぎない。

神風特攻隊員に志願した台湾人の手記を紹介する。著者黄華昌は少年航空兵として日本で終

戦を迎えた人である。両親に内緒で、無断で少年航空兵に志願をしたとき、小学校のクラス担任の日本人教師に手続きを頼んだところ、その担任は、「日本人でさえ難しい少年飛行兵だぞ、チャンコロのおまえなんか合格するもんか」という捨て台詞をはいて、てんで相手にしてもらえなかった悔しい思い出を綴っている。この教師は常々「シナ人根性」「チャンコロ精神」と台湾人生徒を罵倒したという。同僚の台湾人教師は内心では憤慨しても口に出せない時代であった。合格書が届いたときには「犬どもめ！チャンコロの俺だって飛行機乗りに合格したんだぞ」と担任を見返した。このような教師も多くいたことは確かである。

余談を記す。この廣少年は立派に陸軍の一兵士である。上官から大変可愛がられ、姓を日本式に変えるよう薦められた。戦争末期は郵便も不通で、台湾から戸籍謄本が取り寄せられない。仕方がないので上官は陸軍大臣の命令の形で改姓名した。本人は改姓を内心喜ばなかったのであるが、上官の好意に不満も言えず、喜んだ顔をせざるを得なかったと記している。改姓名は「廣田」で、廣の中に旧姓の黄が残るように希望したとも記している。

翻って、韓国ではどうであろうか。韓国からの留学生（P氏 現在大学教師）と話をしていると、お互いのけなし言葉に話題がいった。「チョッパリ」（草履を履くので牛や豚のように指が分かれている野郎の意）だの「ウェノム（倭奴）」だの「チョウセン」・「チョンコ」だのが、お互いに紹介された。ここで「中国人」を戦前には「チャンコロ」とけなし言葉があったことを紹介した。留学生はその言葉なら知っているとびっくりした。「チャンコロ」は韓国語だと思っていたという。韓国では中国人を卑しめていうときに使うというのである。日本語だとは思っても寄らなかったとびっくりした。日本人は一等国民、韓国人は二等、支那人は三等という意識を植え付けられ、自分の下に「チャンコロ」を見下すことで精神の安定を得ようとしたのだろうか。

- (3) 2014年1月に台湾人企業家沈柏勝氏の講演を聴いた。「中国投資の危険性を暴く」である。自身の受けた不当極まりない中華人民共和国政府の処置に憤ると共に、表題に示す危険性について、実例を挙げて説明するものであった。彼は、不当な司法判断に抗議するために天安門広場で割腹自殺を図り、九死に一生を得た人である。同時に日本人企業家広瀬勝氏の講演もあった。沈氏と同様な不当司法判断で1億円近くの損失を被り、責任者は出国できないように拘束される実体を暴いた。沈氏の講演の説明文には「中国」の代わりに「支那」（漢文）「シナ」（和文）が使われていた。台湾人の若い通訳は「ちゅうごく」と訳した。演者の意図を理解できていないと思えた。若い台湾人には「支那」の意味するものを正しく理解することは困難である。講演の後に演者に尋ねたところ、日本語説明文の作成に協力した台湾人（日本語世代の

老人であろう)が、「支那」とすべきだと教えたので、漢文、和文ともに「支那」「シナ」としたとことで、支那の意味することは深くは知らないとのことであった。北京語の講演の中では「zhongguo」であったので、通訳は当然に「ちゅうごく」と訳した。訳を間違えた訳ではなかった。演者、通訳に限らず、台湾の若い世代では、日本語世代の老人が話す「支那」「チャンコロ」の意味が理解できていない。

- (4) 高雄に「支那人お断り」(漢文表記)と店の名刺にも記すレストランがある。勿論、日本語世代の本省人の経営だろう。支那人とは中華人民共和国からの観光客を指すものではない。彼らには、このように「支那人」と記しても、意味が伝わらない。ここは、外省人を当て擦った記述である。店主の外省人に対する反感を表明するためのものである。因みに、日本人の来店は大いに歓迎とのことであるので、一度行ってみたい。